

聖書：ヨハネの黙示録 17：7～18

説教題：みこころが実現するように

日時：2021年7月25日（朝拝）

前回 17 章 1 節で 7 つの鉢を持つ 7 人の御使いの一人が来て、ヨハネにこう語りかけました。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。」大淫婦とは何でしょうか。先週の復習になりますが、大淫婦とは、その名の通り、正しくない道へ誘惑する存在のことです。どこへ誘惑するかと言えば、まことの神礼拝から人々を引き離し、誤ったものへの礼拝すなわち偶像礼拝へと導く。この大淫婦は、5 節に出て来たように大バビロンを指します。大バビロンとは、旧約聖書に出て来るバビロンがそうであるように、神を無視して自らを誇り、自分に栄光を帰すこの世の都市や文化、その社会やシステム等を指します。ヨハネの黙示録が書かれた当時ではローマという世俗都市となります。この大淫婦は前回の 3 節で「獣に乗っている」と言われた通り、獣と一緒に働きます。獣とは悪魔の手下となって神と教会に敵対するこの世の政治権力、支配者のことです。獣と大淫婦はそれぞれ違った方向から神と神の教会に敵対します。獣はそのために権力を用います。ローマ皇帝を拝まなければ殺すと脅し、恐怖によって人々を従わせます。一方の大淫婦は誘惑という方法を用います。この世の祝福、特に経済的繁栄、この世での成功、名声などをぶら下げて。その結果、人々は神よりもローマに従い、ローマと結び付くことを優先するように駆り立てられます。華やかなこの世の都市文化に引き付けられ、経済的利益を得て、良い暮らしをし、新しいもの・便利なものに囲まれて、豊かな生活を送ることをむさぼり求めるようになる。もちろん正しい働きを通して利益を得ることは良いことですが、それが神に従う生活を幾分でも後回しにするなら偶像礼拝です。それは神を捨てて大淫婦の誘惑に身をささげることであり、淫行のぶどう酒を飲むことです。そしてそのぶどう酒を飲んで正しい判断ができなくなり、益々あるべき道から外れて行くこととなります。

御使いはこの大淫婦についての幻をヨハネに見せた後、7 節で「この女の秘められた意味と、この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘められた意味を、あなたに話しましょう」と言います。そして先に獣について 8～14 節で語ります。今日の箇所が多くはこの獣に関する事で占められています。それは獣が持つ位置の重要性によります。以後、獣について注目すべき 3 つのことが言われています。

まず一つ目に、8節で獣が「昔は」「今は」そして「やがて」という言葉で表現されています。これで思い起こすことは何でしょう。それはこの黙示録で神またはキリストが、この形式をもって表現されて来たことです。冒頭の1章4節で神のことが「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」と言われていました(1章8節、4章8節、11章17節も参照)。つまりこの8節の獣についての表現は、神またはキリストのパロディであるということです。獣はサタンと同じく自らがまるで神であるかのように振る舞おうとしています。しかしよく見ると形式は同じでも、中身は違います。ここに「昔はいたが、今はいません」となっています。これは今は全くいないとか、何の活動もしていないという意味ではありません。悪魔はキリストの十字架と復活によって決定的に敗北し、天から地に投げ落とされたと12章で言われました。それ以後も教会を迫害するために激しく動き回っていますが、以前持っていた支配権ははく奪され、かつてと比べて著しく制限された状態に置かれています。サタンの下にある獣も然りです。しかしそれで終わりとはならない。「やがて底知れぬ所から上って来る」とあります。これは歴史の終わりに、これまでとは比較にならないレベルで活動する時のことを指します。そのことはすでにこれまでも何回か見て来ました。11章7節に「二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう」とありました。これはまさに同じ時のことです。やがて教会を殺してしまうと表現されるほどの活動をする時が来ると言われました。13章7節も同じです。そこに「獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された」とありました。また近いところでは16章13節以降のハルマゲドンの戦いに関わる獣の活動とも同じです。あるいは後に見る20章3節とも関係します。そこはいわゆる千年王国が語られる箇所、千年の意味はその時に見ますが、そこに竜すなわち悪魔が制限のかけられた状態にしばらく置かれ、その後、解き放たれると言われます。そして7節以降に最後の活動に出ることが記されています。このサタンの最後の活動と連動して、獣はやがて底知れぬ所から上って来るわけです。しかし今日の8節で、その後「滅びることになります」と続きます。これが獣の最終結果です。ここに神またはキリストとの大きな対比があります。いくら形式だけ神をまねても最後は滅びに行き着くのです。しかし地に住む人々、この世の人々は、その獣を信じてしまうと言われています。世の終わりの力強い現れを前にして驚き、圧倒され、それについて行ってしまいます。

2つ目に言われているのは獣の7つの頭についてです。これは9節に「七人の王た

ち」のことだと言われています。そして10節に「五人はすでに倒れましたが、一人は今いて、もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずです。」とあります。これは一体何のことでしょうか。しばしばこれを歴史上の人物、特にローマ皇帝の誰を指しているかと議論したり、歴史に現れた様々な国々に具体的にあてはめて議論する人たちがいますが、黙示録は基本的に象徴的表現で書かれています。「7」という数字は特にそうです。ですからここは7が持つ象徴的意味から考えることが大切だと思います。7はこれまで見て来た通り、完全数です。歴史に現れる神に逆らって立つ色々な王や国家が、この7つの獣の頭で表されています。そして大事なのは5人は過ぎ去って、今6番目の時代にあると言われていることです。つまり終わりはもう近いということです。最後7番目の王が来れば、その時こそ歴史の最後の日です。その時はいつでも来得る状態にある。間もなく最後の時が来る！そういうメッセージをこれは語っていると考えられます。

難しいのは11節です。ここに8番目の王が出て来ます。しかもそれは「七人のうちの一人でもあり」と言われ、読んでいると頭の中が混乱して来ます。これは何のことでしょう。ここに「昔はいたが今はいないあの獣」と言われていますから、この8番目の王は、8節で見た獣のことだと分かります。その獣の、歴史における色々な現れとして、7つの頭に相当する王たちがいますが、この8番目は7つの頭のどれかというより、その本体、獣自身を指すと考えられます。新改訳の「七人のうちの一人でもあり」とあるのを読むと、7人の中の誰か一人という意味に読めますが、原文は「七人からのもの」という表現になっていて、それは先に見た7人と同列の存在ではなく、その7人のエッセンスをまとめたような、その総決算とも言えるような存在を指すと思われる。8番目という数字は、おそらくイエス様の復活と関係するのでしょう。イエス様が十字架にかけられた金曜日は週の6日目に当たり、土曜日の安息日は7日目、復活した日曜日は8日目となります。イエス様が復活後、弟子たちに最初に現れた日曜日の一週間後にトマスに会うために再び来られた日も、ヨハネの福音書20章26節で「八日後」と言われています。つまり獣はここでまたしてもイエス様をまねし、イエス様の8日目の復活に相当するような勢いと力を持って現れるというわけです。しかしここでもその最終結果が「滅びることになります」とあっさり皮肉をもって語られています。

3つ目は12節以降の獣の10本の角についてです。これは10人の王たちのことで、

彼らはまだ王権を受けておらず、「獣とともに、一時だけ王としての権威を受ける」とありますから、これは歴史の終わりに最終的な獣の現れとセットで現れる王たちを指すと考えられます。この10人の10という数字も象徴的な意味で、「多くの」とか「全世界的な」という意味と思われる。そしてその王たちとは16章14節や16節で見た王たちと同じと思われます。つまり歴史の最後の時にハルマゲドンの戦いに参戦する王たちです。これらの王たちは今日の13節にある通り、一つ思いとなり、獣に自分たちをささげて戦います。誰とでしょうか。14節にある通り、子羊と、です。このハルマゲドンの戦いの詳細は、なおこの後で語られますが、ここでは急いで結果だけが述べられます。14節にある通り、それは「子羊は彼らに打ち勝ちます」ということです。子羊は主の主、王の王だからです。また子羊とともにいる主の民は、その勝利にあずかります。ですから主につく者は恐れなくて良いのです。やがての最終的な獣が現れることによって恐ろしい日の来ることが予期されますが、結末は確定していません。私たちに求められていることは、14節最後に記されている通り、主に忠実な者たちであることです。

さてこう語った後、御使いは15節以降で今度は女すなわち大淫婦の秘められた意味について語り始めます。大淫婦のさばきは具体的には18章以降で語られ、今日の箇所はその大まかな概略までです。こちらにも3つにまとめて考えることができます。一つ目は大淫婦が座している水についてです。15節に「あなたが見た水、淫婦が座しているところは、もろもろの民族、群衆、国民、言語です」とあります。前回触れましたが、その昔のバビロンはユーフラテス川の両岸に町が作られ、市内には沢山の運河が巡らされ、バビロンはまさに大水の上に座すと表現される町でした。そこから流れ出る水、また水運を通して、バビロンは全世界とつながり、全世界に影響を与えました。そのように大淫婦は経済的な繁栄と人間中心の文化をもって、世界の国々を引き付け、支配していました。黙示録の書かれた当時で言えば、この大淫婦はローマですが、今日ならどうでしょうか。ニューヨーク、ロンドン、東京のことも考えるべきではないでしょうか。

しかし2つ目に注目することとして、16節に驚くべきことが言われています。何と10本の角と獣が「やがて淫婦を憎み、はぎ取って裸にし、その肉を食らって火で焼き尽くすことになる」と言います。獣と大淫婦は協力して神と神の民に逆らうのではなかったのでしょうか。彼らは悪の同盟軍ではなかったのでしょうか。ここに悪は自己破壊

的であることが示されています。悪者はいつまでも互いに平和には生きられない。悪いことにつながっている友はやがて対立し、憎み合い、争い合い、自己崩壊に至る。どういうことなのでしょう。おそらくこの世の豊かさや快樂を求める生き方は、決してその人に本当の満足を与えないということと関係するのではないのでしょうか。富を求める人はどこまで富を求めても満足しない。より高いレベルの生活を求める人は、どこまで上に進んでも満足しない。高額なものを買う人は、より高いものが欲しくなり、かえってフラストレーションに陥る。そしてそのフラストレーションから、何かあると互いにねたみ、憎しみ合い、争いに至って自滅する。偽りのものを求める時、人はそうなるのです。その結果、繁栄を誇った都市、あるいはその社会、あるいはその文明が、王たちにより、武力により、滅ぼされる。それは確かに歴史の中で繰り返されて来たことではないのでしょうか。それがやがて最終的な形でこの世界に生じ、大淫婦は空しく最後に滅ぼされるのです。

そして3つ目に見るのは17節に、これらすべての出来事の上に神の主権的御手が働いていると言われていることです。18節にある通り、大淫婦はそれまで地の王たちを引き付け、支配していましたが、その大淫婦が王たちから逆襲され、滅ぼされるといふ驚くべき展開が16節で示されました。しかしそれはただ単に悪の内部分裂というだけの話ではないのです。17節にそれは神の御手によると言われています。すべては神がご計画に従って、ご自身の御心を実現するように、彼らの心を動かし、導いておられたと。この結果、10人の王たちは一つ思いで獣に忠誠を誓い、こうして最後の決戦、ハルマゲドンの戦いへとなだれ込みます。神は彼らをこうしてまとめて、14節で見た通り、子羊キリストのもとでさばかれます。そのさらに詳しい様子はこのあと18～19章で見ることとなります。

以上、今日の箇所から私たちは世界の歴史が今後どのように進むか、大まかな見通しが与えられます。サタンと獣は今ももちろん働いており、決して過小評価できませんが、それでも8節によれば「今はいません」と言われる状態にあります。しかしこれはかえってこの後の現れの不気味な恐ろしさへと私たちの注意を向けさせます。その日はいつ訪れるか分かりません。ヨハネの時代にすでに7人の王の内、6番目までが来ていると言われました。とするなら第7の王が来る日はそこまで迫っています。いやもしかすると私たちはその時代の中に入っているかもしれません。そして獣そのものである第8の存在が、世界の国々や王たちを支配下に治めて、最後の激しい戦い

に臨む日がすぐそこまで来ているかもしれません。歴史はこのような最後に向かって
いることを覚えて気を引き締めなければ！と思わされます。そのための準備をしな
ければ！と思わされます。しかし一方で主に信頼する者は慌てる必要がありません。子
羊が必ず勝ちます。主の主、王の王だからです。ですから私たちはこの子羊キリス
トに信頼し、その方に忠実な民として歩むこと、これこそが最もなすべき備えであ
ることになります。

そしてもう一つ今日の箇所から思うのは、悪の同盟はうまく行かないということ
です。それは自己崩壊へと至る。またこの世の栄え、この世の流行、この世に属する美
しさを求めても、最後は滅ぼされ、消える。神から離れてそれらを追い求める歩みは
最後にこのようにさばかれ、無に帰すのです。その日、この世の大バビロンには何と
いう大混乱が生じることでしょう。これまで人々が信頼を寄せ、積み上げて来た人間
的な繁栄とその文化、経済や富、技術やシステム、またこの世の評価とその基準等が
崩壊し、根底から揺り動かされるような事態が生じる。多くの人が魅了されて付き従
った大淫婦が裸にされ、その肉を食いちぎられ、火で焼き尽くされるという、世の人
すべてがショックに突き落とされるような状況が訪れる。しかし覚えるべきは、そん
な中でも神のご計画は最終実現に向かって着々と進むということです。神の御前では
何のハプニングも起こっていない。神は悪さえも支配して御心の実現を進められる。
私たちはどんな中でも心騒がせず、この神の驚くべき主権を見上げ、信頼したいと思
います。神は今日も御心の実現するように、すべてを確実に導いておられます。その
神がくださった主の主、王の王なる子羊にこそ従い、この方を通して与えられる勝利
と御国の幸いへと至る歩みへ導かれたいと思います。